環境セミナー概要報告

紙パルプ技術協会 環境技術委員会

Review of the Enviromental Seminar (1994)

Enviromental Committee, JAPAN TAPPI

注目を集めた第1回環境セミナー

環境技術委員会は、9月9日、紙パルプ会館において日本製紙連合会協賛による初めての環境セミナー及び環境機器展示会を開催し、各方面から注目を集めた。

参加者は、紙パ各社から105名、環境技術委員会・日本製紙連合会から約15名、環境庁・通産省から3名、環境庁記者会から4名を合わせて約130名に達した。その他、展示会の行事には環境機器メーカー他8社及び製紙メーカー8社の参加があり、盛況であった。当日実施したアンケートによると、講演会の内容については87.5%の方が期待した通り又は期待した以上との評価であった。

以下に講演会、RTD及び機器展の概要を報告する。

大國委員長あいさつ

冒頭、大國環境技術委員会委員長より環境セミナー開催に当って「昨年11月には環境基本法が成立し、紙パ各社でも自発的に環境監査制度を発足させ、地球的視点で環境問題を捉えていく体制を固めつつあるが、紙パ業界を見る外部の眼は必ずしも好意的ではない。一方、世界第2位の製紙産業国でありながら、環境技術関連の基礎的データは殆ど海外の研究に依存しており、自らの手で環境問題の科学的解明を行い得ないのは残念である。是非、我々自身で自前で行えるように

なりたい。植林、低資材の活用、古紙のリサイクル等地球環境問題に寄与している実態も知って貰う必要がある。我々サイドにPR不足があったのも事実であり、今回のセミナーを契機にこうした現状を打破し、業界の発展に繋げて欲しい」との御挨拶を頂いた。

特別講演（招待講演）

(1) 『現代の環境問題と企業』（岡島成行氏）

特別講演は、読売新聞社編集局解説部次長の岡島成行氏に『現代の環境問題と企業』と題してお願いした。自己紹介を兼ねて1980年代までの政財界の環境問題への対応についてのお話は実名入りで大変興味深かった。本題では、日本の環境政策研究の遅れとそこから派生したと考えられる弱者軽視の姿勢が指摘され、その反省を踏まえて、地球サミット後の課題、特に南北問題に、日本として産業界として世界のリーダーになる覚悟で臨むべきではないか。例えば、二酸化炭素ガスの問題にしても、日本のエネルギー使用量は既に1975年（昭和50年）の倍になっており、その当時の事を思い起こしてみれば、排出量を2000年迄に1990年レベルとする当初の計画が国として達成出来ないとは言い難く、正に日本の姿勢が問われるのではないかと御意見であった。

又、環境基本法に盛られた意図の実現に当たっての環境庁の役割は、他省庁に実務は任せ環境保全型の予

算の獲得を後押すと言った調整官庁に徹した方がいいのではないか。それに準ずる意味で企業に於ける環境管理部門の役割とは、全体を把握した上で必要な施策を答申し、実務は関係のある他部署に任せる事ではないかとの提言もあった。

最後に、環境問題がもたらした新たな観点として、国境を越えたグローバリズム的発想、次世代への配慮、自然との共存の必要性を挙げられ、現代の西洋的倫理感にのみ依存するのではない、新しい環境倫理の確立を説かれた。

(2) 『NEC の環境管理活動』(山口耕二氏)

招待講演としては、日本電気株式会社環境管理部長の山口耕二氏に『NEC の環境管理活動』の紹介をお願いした。日本電気に於ける環境管理の出発点は、1969年に現小林名誉会長がローマクラブへ参加した時点であり、基本方針として、

1. 自発的活動(トップダウン・全員参加・組織的活動)
2. グローバルな視点(企業に求められているものは何かについての認識)
3. 活動実績の自己評価(第三者の理解を得るための努力)

を掲げて活動を開始し、1973年には早くも環境監査の実施に着手した。現在迄の環境管理活動で重視してきた点は、対象範囲の明確化、目的管理、階層別教育の実施、各種イベントの開催(論文募集・環境強調週間設定・パネル展開催他)等で、常に全社的な盛り上げを図って来た。又、1983年、環境監査に定量的手法を導入して客観性を高めた事により、監査の効率化(好成绩事業所の監査簡略化)が可能となったとのこ

とであった。

現在、環境管理活動を支えていくに当って5つのI, INFORMATION, INTELLIGENCE, INITIATIVE, INTEREST, INNOVATIONを紹介説明され講演を終えられた。

尚、仕様されたOHPシートの内容は希望者に配布可とのことで、希望のあった約10社に送付した。

一般技術講演

技術講演では、先ず、三菱製紙の鈴木取締役より、本年4月にアメリカ・オレゴン州ポーランドで開催されたTAPPIの環境会議に出席された際に聞かれた最新情報をお話頂いた。関係者の話しによると

1. 北米において環境問題は、短期の収益確保優先の経営雰囲気の中では慎重な対応を要する事項で

あったが、

2. クリントン政権になって要求先行で企業に対して敵対的ともいえる状況となり、
3. 過去に於て環境保全に対してそれ程投資をして来なかった事への反省感を強くしていたところへ、更に、世論調査の結果、紙パ産業としての自己認識と外部の認識の間の大きなギャップが判明し業界の指導層は大きなショックを受けた。

従って、今後の対応について、業界として最終ゴールを明確にして体系的・多面的な技術転換を図ろうとしている様で、決断したら行動の速い彼等のこと、ダイナミックな技術展開も考えられるとの事であった。その他、EPA から提案されているクラスタールールに対する AF&PA の反論の実態、業界の AOX 対応の現状と今後の取組姿勢(長期的には MIM 志向)、カナダ BC 州の動向についても御説明頂いた。

(MIM=Minimum Impact Mill)

次いで紙パルプ技術協会の飯田専務理事より『欧米の環境問題の考え方』と題して、地球環境問題を背景に製紙産業の抱える問題を、有機塩素化合物・リサイクル・二酸化炭素という観点から取り上げ、最近の欧米の見方を解説して頂いた。

有機塩素化合物については、ダイオキシンの持つ発癌性・催奇性・内分泌系異常・免疫能低下といった面が議論の中心である。北米・北欧では、1980 年代の排水処理設備の不備から流失したダイオキシンが魚類に蓄積しており、この対策としてできる限り有機塩素化合物の削減を目指している。リサイクルにおいては、古紙回収=再生紙だけではなく、再生紙化がコスト高になる場合にはサーマルリサイクル(エネルギー回収)も考慮すべきであるとの意見が最近の FAO の会議でも目立ってきている。二酸化炭素問題では、木材は唯一再生可能資源で温暖化現象には中立であり、むしろ紙パルプ産業としては、再生不適な古紙は熱回収に向け、化石燃料の代替化を図り温暖化抑制に寄与す

るという新しい発想を紹介された。

RTD (3 テーマ) 実施

ラウンドテーブル・ディスカッションは、下記 3 テーマで実施した。

- I 産業廃棄物とその利用 (全参加者 12 社 23 名)
- II 臭気対策に関する操業管理 (全参加者 11 社 21 名)
- III 環境に関わる異常時の対応 (全参加者 8 社 11 名)

各グループ共、事前に依頼しておいた課題について実態報告をして貰い、その後で質疑応答・意見交換を行った。非公開を原則としているので、各グループの発表内容の項目だけを記載する。

グループ I

- (1) 産業廃棄物の種類別発生量とその削減対策
- (2) 現状の処理方法
- (3) 処理コストとコストダウン対策
- (4) 廃棄物の有効利用
- (5) 雑廃棄物(ラガー、抄紙用具等)の処分方法

このグループでは、冒頭、「平成 5 年度紙パ業界に於ける廃棄物に関するアンケート調査結果」についての報告があった。

グループ II

- (1) 臭気フロー
- (2) 1 号規制に係わる対策と課題
- (3) 非定常時及び異常時に於ける問題点と対策
- (4) 3 号規制に係わる現状と対応方針

(1)については全発表者、(2)~(4)は 1 項目を選択して説明した。

グループ III

- (1) 工場概要
- (2) 社内連絡網
- (3) 事前対策
- (4) 防止対策(事故報告書、模擬訓練等)

(5) 社外連絡

所要時間を2時間と予定して発表・自由討議の時間配分を考えたが、各グループ共、時間不足となり、若干消化不良となったことは否めなかった。しかし、各社の実状が分かり問題点を互いに理解し得たことで、一体感の醸成に役立ったものと思われる。次回以降、テーマの絞り込み及び参加者数と時間配分を見直したい。

展示会

展示会については、8社の協力が得られた。一部の参加企業は紙パ業界は初めてで馴染みの薄い面もあったが、双方が新しい分野・新しい企業を知ることにより

義があったと思われる。紙パ各社の展示は正に手作りであったが、産業廃棄物の再利用について現時点で出展可能な品を揃えた。担当者の苦勞を汲んでいただければ幸である。只、展示を見る時間が十分設定出来なかったこともあり、次回以降どうするか再検討を要する。アンケート結果によれば、57%の方が参考になったとの解答をしておられた。

1階のロビーでは、海外の造植林活動を伝える写真を展示すると共に、各社から提供のあったビデオテープを放映した。内容は、工場紹介、海外植林、ミルワイドシステム、飲料容器回収再生等広範囲であったが、事前に、参加された皆様に十分PRして無かった為、あまり御覧頂けなかったのではないかと反省している。

御参加頂いた各社は以下の通り。本誌をお借りし、改めて御参加の御礼を申し上げる次第である。

〈機器メーカー〉

1. 濁川理化学工業株式会社
2. 東洋興商株式会社
3. テイサン株式会社
4. 荏原実業株式会社
5. 東洋エンジニアリング株式会社
6. 日本インカ株式会社
7. 笠原理化学工業株式会社
8. セントラル科学株式会社

(申込順)

〈製紙メーカー〉

1. 新王子製紙株式会社
2. 大王製紙株式会社
3. 大昭和製紙株式会社
4. 中越パルプ工業株式会社
5. 日本製紙株式会社
6. 北越製紙株式会社
7. 本州製紙株式会社
8. 三菱製紙株式会社

(アイウエオ順)

おわりに

以上、第1回目の環境セミナーを終えることができたが、会場準備、外部周知、展示物提供、写真用意、参加者募集他多くの御協力を頂いたことに厚く御礼申し上げますと共に、来年の第2回セミナーへの積極的御支援をお願いしたい。尚、講演内容については紙パ技協誌環境集号(来年3月発行)に掲載する予定である。

(まとめ: 協会 田口)